

《論文》

体育授業における戦術学習に関する一考察（1）

—サッカーに着目して—

深田 忠徳

# 体育授業における戦術学習に関する一考察（1）

—サッカーに着目して—

深田 忠徳

和文抄録：本研究の目的は、サッカーの授業を行う現場教員へのインタビュー調査から、体育授業における「戦術学習」の実態及びそれに関する教員の意識について明らかにすることである。

研究の方法は、サッカーの専門家としての豊富な経験を有する現場教員を選定して、半構造化インタビューを実施した。質問項目は、高等学校学習指導要領解説にある「ボール操作」及び「ボールを持たない時の動き」におけるそれぞれの「例示」に記された内容を設定した。

結果、「安定したボール操作」というサッカーの基礎的技術となる個人スキルが獲得されていないなかで、「ボールを持たない時の動き」といったより専門的かつ戦術的なプレイが求められることに対して、教員側は指導に対して苦慮しており、学習指導要領と現場とは乖離しているとの認識があることが明らかになった。

キーワード：体育、戦術、サッカー

## 1 はじめに

体育授業における球技サッカーは、「ゴール型」に分類される。学習指導要領解説（2008）によれば、『『ゴール型』とは、ドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートやトライなどをして、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合うゲーム』<sup>1)</sup>として位置づけている。各カテゴリーの「技能」に着目すれば、小学校第1・2学年では、「ボールゲームでは、簡単なボール操作やボールを持たないときの動きによって、的に当てるゲームや攻めと守りのあるゲームをすること」<sup>2)</sup>。小学校第3・4学年は、「ゴール型ゲームでは、基本的なボール操作やボールを持たないときの動きによって、易しいゲームをすること」<sup>3)</sup>。そして、第5・6学年では、「ゴール型では、簡易化されたゲームで、ボール操作やボールを受けるための動きによって、攻防をすること」<sup>4)</sup>とされている。中学校になれば、第1・2学年では、「ボール操作と空間に走り込むなどの動きによって前での攻防を展開すること」<sup>5)</sup>となり、第3学年では「ゴール型では、安定したボール操作と空間を作り出すなどの動きによってゴール前への侵入などから攻防を展開すること」<sup>6)</sup>と示されている。さらに、高校では「ゴール型では、状況に応じたボール操作と空間を埋めるなどの連携した動きによって空間への侵入などから攻防を展開すること」<sup>7)</sup>が求められている。学習指導要領における「ゴール型」の「技能」を俯瞰すれば、生涯スポーツの観点から、小・中学校、高等学校までのそれぞれの発達段階に応じた体系的な指導内容が形成されていることが理解できる。学年・カテゴリーが上がるにつれて、個人戦術の「ボール操作」に加えて、「スペースメイクや連携した動き」などの集団戦術の要素が入ってきている。すなわち、サッカーの授業においては、「多様なプレイ状況を『判断』しながら技能的・行動的な対応（ボール操作の技能＝on the ball skill、ボー

ルを持たない時の動き = off the ball movement) ]<sup>8)</sup>が求められており、戦術的な学習が必要とされるのである。

岡出（2017）によれば、「戦術学習」（Teaching Games for Understanding 〈TGFU〉）は1982年にイギリスで提案され、そこでは「スポーツの文化的理解や動きの理解」と「全員参加や成功体験の保証」が核となっており、指導においては、「戦術指導」「技術指導」の二者択一ではなく、授業の実態に即して柔軟に活用していくことが望まれる<sup>9)</sup>。そこで、本研究では、サッカーの授業を実践する現場教員へのインタビュー調査から、体育授業における「戦術学習」の実態及びそれに関する教員の意識について明らかにすることを目的とする。

## 2 方法

調査対象者は、現場教員1名である。対象者は、「サッカー経験30年、教員歴8年」という経歴があり、サッカーの専門家としての豊富な知見を有しており、研究課題に関する多くの情報収集が期待されることから選定した。分析データは対象者1名に対して面接者1名で、半構造化インタビューによって収集した。インタビュー調査によって得られたデータは、そのコメント内容の類似性によって分類し、検討を加えた。インタビューの時期は、2016年7月18日、時間は1時間40分であった。なお、インタビューの際には、研究の目的について説明し、インタビュー内容をICレコーダーにて録音することの承諾を得たうえで実施した。質問項目については、高等学校学習指導要領解説にある「ボール操作」及び「ボールを持たない時の動き」におけるそれぞれの「例示」に沿って逐一質問していく形式で実施した。「例示」については以下のとおりである<sup>10)</sup>。なお、サッカー教材に合致しない内容は除外することで対応した。

### 〈ボール操作の例示〉

#### 入学年次

- ・ 守備者が守りにくいタイミングでシュートを打つこと。
- ・ ゴールの枠内にシュートをコントロールすること。
- ・ 味方が操作しやすいパスを送ること。
- ・ 守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすること。

#### その次の年次以降

- ・ 守備者のタイミングをはずし、守備者のいないところをねらってシュートを打つこと。
- ・ 味方が作りだした空間にパスを送ること。
- ・ ゴールに向かってボールをコントロールして運ぶこと。
- ・ 守備者とボールの間に自分の体を入れて、味方と相手の動きを見ながらボールをキープすること。
- ・ シュートを打たれない空間にボールをクリアーすること。

### 〈ボールを持たない時の動きの例示〉

#### 入学年次

- ・ ゴール前に広い空間を作り出すために、守備者を引き付けてゴールから離れること。
- ・ パスを出した後に次のパスを受ける動きをすること。
- ・ ボール保持者が進行できる空間を作り出すために、進行方向から離れること。
- ・ ゴールとボール保持者を結んだ直線上で守ること。
- ・ ゴール前の空いている場所をカバーすること。

#### その次の年次以降

- ・ 自陣から相手陣地の侵入しやすい場所に移動すること。
- ・ シュートやトライをしたり、パスを受けたりするために味方が作りだした空間に移動すること。
- ・ ボール保持者がプレイしやすい空間を作り出すために、必要な場所に留まったり、移動したりすること。

- ・スクリーンプレイやポストプレイなどの味方が侵入する空間を作りだす動きをすること。
- ・得点を取るためのフォーメーションやセットプレイなどのチームの役割に応じた動きをすること。
- ・チームの作戦に応じた守備位置に移動し、相手のボールを奪うための動きをすること。
- ・味方が抜かれた際に、攻撃者を止めるためのカバーの動きをすること。
- ・一定のエリアからシュートを打ちにくい空間に相手や相手のボールを追い出す守備の動きをすること。

### 3 結果と考察

テキスト分析によって、「高度なレベルの要求」「態度の重視」「生涯スポーツの観点」「女子及び運動嫌いの生徒へのアプローチ」「時間的制約」「戦術理解」にカテゴリ化した。以下、各カテゴリで考察していく。

#### (1) 高度なレベルの要求

教員からすれば、例として示された内容について全体的に「高度なレベル」が求められていると感じているようである。

表1 高度なレベルの要求

レベルが高いです。部活での話みたいな感じがしますね。
これはものすごくレベルが高いことだと思いますし、これ逆に生徒がいっぱいいっぱいになるかなと思います。こういうことを細かいことを言っていっていったら。
これは正直、授業のなかでは絶対に難しいと思います。部活の子でもなかなかこういうことができないのに、またサッカーというところになったらまた余計違うかなと思います。他のバスケとかだったら、ボールの枠も的が絞やすいというか、キーパーもいないですし、サッカーはキーパーいますもんね。逆にキーパーも素人なわけで、例えば日に日によって「キーパーをみんなで協力してやりなさい」という言い方をすることもあるのでなかなかやりたがらないですし、そうなったときに「キーパーのタイミングをずらして」となっていますが、そもそもキーパーはそういう行動をしない。だから、そもそも成立しない。
サッカーというのは、まず人数も多いですし、場も広いので一回一回ストップさせてこういうのを細かにというのは、もちろん指導をしていかないといけないんですけど、それはやっぱり難しいかなと思います。難しいのはやっぱり生徒の反応は鈍いですね。
まずないですね、難しすぎる。部活の話です。授業ではちょっと。言葉だけは書かれていますけど、実際そのレベルではないと思います。目の前の生徒たちは。そんな見ながらサッカーするなんてなかなか難しいとおもいます。

授業において「例示」された内容をねらいとして実践することは、学習者にとって、とても技術的に困難であるということが、教員の発言からみてとれる。教員は、こうした内容について「指導をしていかなければならない」という認識はあるが、学習者にとっては高度なレベルであるということから、授業での学習者の反応が鈍くなるという恐れがあり、そのことで学習者の活動意欲の低下を懸念している。そこでは、「ボール操作」と「空間」認識についての習熟レベルに依るところが大きい。

表2 空間を意識したプレイ

「空間」という言葉をサッカーで使わないことはないんですけど。この「味方が作りだした」というのは結構高度ですよ。部活でもなかなかしたいけどできないみたいな。これが意図的にできるような指導を正直したことはない。「意図的に空間を作り出せ」とか、「意図的にここにパスを送りなさいよ」というのを授業でやったことはないです。
そこまで意識するのは授業のなかでは多分ないと思います。ボールに対して向かっていくとか、そういう表現になるのかなと思います。「空間」とかもう一步レベルの高い話かなと思います。
なかなか難しいと思います。サッカー競技ですよ。例えば空間察知能力だとか判断力だとかを少し学ばせたいやり方、例えば鬼ごっことか、そういうのはありますけど、サッカーに特化したなかで戦術的な話ですよ。しかも入学年次にやるのは、なかなかむずかしい。

<p>高度すぎますし、正直授業のなかではそこまでは難しいです。そういう所までは要求しないですね。不可能だと思います。ボールを持たない時の動き、比重のかけ方と言ったら絶対「ボール操作」の方になるので、「ボールを持たない時の動き」で、また教え方も高度になってくると思うんですよね。それこそ空間察知能力が必要だし、周りを見る能力も必要だし、というところを素人の子たちに対して授業のなかで、というのは、ちょっと難しいかなと思います。実際にありえないです。</p>
<p>難しいと思います。いやーこれ高度すぎますね。「ボール操作」ができたうえの話ですよ。ボールを持たない動きとなっていますけど。やっぱり一人じゃできないですよサッカーって。これできる人たちの話ですよ。サッカーは単純に空間が広いですから、ましては足ですし。かといってバスケでもここまではレベル高いかなって。</p>
<p>「相手の守備を見ながら自陣から相手ゴール前の空間に」で、その瞬間に敵を観て、ボールを観て、スペースを観てる感じなのでそういうのは難しいです。普通の子たちは一つです。ボールの来たところに行く習性がある。だから、怪我也起こりやすいです。ボールしか見えていないですし、空間もみえていない。(ボール)操作ができないからです。操作ができればストップもできますし、(相手の)逆を突くこともできるんですけど、自分のストップもきかないので。だから、授業のなかでアクロバティックなことになったり、結構あります。お互い一生懸命やっているのですが、それってそこしか見てない結果ですよ。なかなか難しく、高度なことかなと思います。</p>
<p>多分やろうとしても、この現象まで行き着かないですねやっぱり。ボール操作ができて、空間を理解できて、入学年次までに。それを達成した後の話ですよ。難しいと思います。</p>
<p>そもそもボール操作ができたうえの話かなとおもいます。現場は、できない子たちが普通ですよというのがポイントです。</p>

高校年代における学習者の「ボール操作」の全体的な技術レベルは低いようである。また、「空間」を意識したプレイは、「安定したボール操作」が伴って、成立することである。部活動等におけるサッカー経験者以外の学習者には、ボール操作に集中がいき、瞬時にボール・相手選手・スペースなどを「観る」ことはできない。そうした状況下で「空間」を意識したプレイは高度なレベルにあるといえる。

全体的に教員は、戦術学習の重要性を認識しているものの、そのレベル内容が高いことを指摘している。日々の部活動で実践している部員にとっても難しいスキルが求められていることに対して、一般の学習者の実状とはかけ離れているようだ。また、「ボール操作」が習得できないままに、戦術的な動きが求められていることは一般生徒には困難であり、「反応が鈍」くなることが述べられている。高校年代であっても「戦術」よりも「ボール操作」に力点を置いた指導がなされているのが現状といえる。

## (2) 態度の重視

個人技術の習得や集団戦術の理解や獲得に向けた取り組みがなされているが、教員の評価の観点として、関心・意欲・態度に目が向けられているようである。

表3 態度の重視

<p>「体育的学力」というところを僕なんかはつけさせないといけないと思うんですよね。普通教科の先生がたがよく学力とよく使う。それを体育にうつした時に「体育の中での学力とは何か?」といたら、やっぱり基本的な基本技能だったりとかするんですけど、それだけではなくて、授業に対する態度だったり、関心・意欲・態度とかあるんですけど評価の観点に。やっぱりそこを僕なんかは重視するので、グループ活動を作る中で協調性を持って、仲間と協力してとか、そういうところも評価の観点になるので。正直、技術的なところを細かく教えるというのは、なかなか難しいのかなあ。後は体育的学力といたら動く量をやっぱり増やさないといけない、運動量ってところはやっぱり学力だと思うので。やっぱり試合を回すことが、こっちは要求されることかなあって。やっぱりこう一時50分のなかでできるだけ運動量を増やす、というところをテーマにしないといけないのかなあ、と思ったらやっぱりなかなか技術に特化したことを言っている暇はないです。</p>
<p>これ技術指導に関することですよ、けど、技術指導もなんですけど、チームワークだとか協調性とか、授業に対する態度とかそっちも評価の観点に入ってくるので、これをバランスよく見たときになかなかここだけに特化して指導するのは難しいかなというのが第一印象ですね。</p>

学習指導要領のなかでも「態度」については示されている。授業のなかでは、フェアプレイやルールやマナーの遵守、役割分担における責任ある行動、作戦などへの積極的参加などが授業のなかでは求められよう<sup>11)</sup>。そうした点については、運動量を確保することや評価の観点から意欲・関心・態度を特に重視していることが理解できる。また、仲間との協力や協調性にも目を向けている。それらを「体育的学力」と位置づけて、「技術に特化したことを言っている暇はない」とするところから、これらに関する評価の度合いが高いことがうかがえる。

また、教員は技術・戦術指導も行うが「試合を回す」ことが教員側に求められているという認識がある。試合を多く実践させることで、運動量の確保をねらいしていることがうかがえる。

### (3) 生涯スポーツの観点

高等学校学習指導要領における体育の目標では、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる」<sup>12)</sup>とある。ここでは、体育授業における「生涯スポーツ」を学習する意義が示されている。そうした観点は、教員も念頭に置きながら、授業を展開している。

表4 生涯スポーツへの連結

<p>こっちが授業の中で求めなければいけないのは、さっきも言いましたけど運動量の確保、そして生涯スポーツへつなげるというのがよく言われていて、そのために高校生のうちから体づくりもそうですし、あと将来自分たちが実践していくというのも降りてきているので、となったら如何に楽しませるかというのが、今最近はそんなふうに言われたりしています。</p>
<p>(選択制でサッカーを) やりたくて来ているのですけど、息がつまるようなことをいわれたら、「あれ、他の種目を選んでおけばよかった」と思う子もいるのかなと思います。単純に何を求めているかって、ゲームだと思うんですよ。「楽しい体育」だと思うんですよ。それはサッカーだけではなくて、バスケも一緒だしソフトもそうなんです。ソフトとかでも、基本技能の練習とかも入れますけど、大概飽き飽きされますね。要はゲームをしたい。それは分かるんですけど、僕なんかやりたくて来ているのですけど。けど、今はそれをどう生涯スポーツにつなげるかというのが大事だと思うんですよ。</p>
<p>そこ(生涯スポーツ)につなげるために高校の体育というのがあるので、如何に楽しく魅力を伝えるかというところだと思うので、ここまでいっちゃうと「無理」と拒絶されるかな。</p>

生涯にわたって豊かなスポーツライフを実践していく態度の育成をふまえて、体育授業と生涯スポーツの連結を図っている。とりわけ「楽しい体育」をめざして、ゲーム中心の授業を展開している。そのなかで、戦術理論的な内容に重きを置くならば、生徒からは「拒絶」される可能性があることを示唆する。生徒のレベルに応じた内容に合わせていくことが求められるが、授業内容における戦術学習の比重の置き方はそれぞれに対応が難しいことが推察される。

### (4) 女子及び運動嫌いの生徒へのアプローチ

女子や運動嫌いの生徒に対しては、細やかで初歩的な指導がなされている。そのため、戦術的な学習は困難なようである。

表5 女子や運動嫌いの生徒の実態

<p>女子に対してこういうのを持っていけるかといったなかなか難しいです。やっぱり今2極化になってきているので、どっちかと言ったら運動嫌いの子たちが多いので、この子たちに寄り添わないといけないので、ここまでは難しいと思います。そもそもパスということに、運動嫌いの子たちが多いので、それでも例えばサッカーを選んできるともいますし、けど学校によってはサッカーというのが決まっている学校もあるんですよ、選択種目のなかに。なおかつ女の子なので運動嫌いの子もいるので、その子にパスしろといってもパスしたがりませんし、やり方もわからないので、達成感とか成功体験を与えないと動いてくれない実状があり、なので、かみ砕いてすごい底辺の底辺から教えるので、「味方が操作しやすいパス」というところまでは、絶対にいけないです。要は「単純にボールを蹴れました」「ああ良かった」、それですよ。</p>
<p>（選択制にて）サッカーを選ぶ子って少なからず動くことに喜びをもってくる人たちが選択制のなかではくるので。とはいえ難しいですよ、持っていき方が。これが単体で決められた学校だとなお難しいでしょうね。女の子って基本的にやっぱりうごかない、で、女の子で固まる。授業中なのに世間話をする。なのでサッカーという授業を持っていてもなかなか難しい。</p>
<p>女の子どうしの試合になっても盛り上がるんですよ。やり方とかわかってないんだけど、ボールにたかって誰かが点数入れてワーってなるのが多分女の子たちは楽しい。だから、戦術だとか細かいところまで持っていかないと、そこまで持っていかないですね。男女差が一つはありますよね。</p>
<p>女子にオフサイドなんて教えたら、逆に女子には教えないといけないですけど、もう動かない生徒は前にいったきりで。</p>
<p>（戦術的に教え過ぎたら）授業に来ないんじゃないですかね。言い方があれですけど。動かない現象が、さらに動かないと思います。今、女子のことも考えて言っていますので。</p>

運動嫌い及び女子の特徴を踏まえたうえで、指導がなれていることが理解できる。こうした生徒を対象に戦術的な細かい部分までは指導できないというのが実状であろう。さらには、そうした点を強調したならば、運動嫌いな生徒や女子生徒は、授業に出席しない可能性があることを示唆している。戦術学習の前段階において運動嫌いや女子生徒へのアプローチは特別な指導が求められている。そこに対応しながら、指導していくことが重要であり、そうした学習者の特性を踏まえながら、達成感や成功体験を与えていくための工夫が教員には必要となる。

### (5) 時間的制約

サッカーでは、「ボール操作」や「ボールを持たない時の動き」の技能が求められているが、そこでは時間的制約がある。

表6 時間的制約

<p>ボールを止める蹴るから初めて行くんですけど、一応授業なので、安定したボール操作、これこっち（教員側）の要求が高ければ高いほど時間が必要になる。</p>
<p>ここに書いているように「ゴールの枠内に安定したシュートを打てるようになる」とかそういう具体的なこといわれたら少し、「味方が操作しやすいパスを完全に送れる」とかいったら、これをするには相当な時間がかかる。</p>
<p>そのゲームを主として持っていきたいのであれば、この基本技能というのはせいぜい3時間ぐらいだと思うんですよ、4時間ぐらい。15回だとしてもオリエンテーションして、人数多いとグループ分けとかするので、グループ分けして基本技能1、2、3とかして、ちょっとしたタスクゲームとか、小さなグループゲームとかして、あと対戦となったらある程度（時間数を）設けとかないと今度は評価ができなくなるので、行事とかで15時間できないことが多々あるので、実際12時間とか。</p>
<p>やっぱり文科省が、述べること、思っていることと現場とはかけ離れているかなというのが一番思う所ですね。限られた時間しかないんで、限られた時間で何をこう求めるかというところの違いかなと。</p>

技術の獲得には、時間が不足しているという実態がある。安定したボール操作の技術はそう容易に習得する

ことはできない。それは、ボールに触れる時間と回数に比例する。そうしたなかで、生徒が楽しめるゲームに時間を割けば、技術獲得の時間はおのずと減少していく。ゆえに、「安定したボール操作」の獲得は望めない。また、カリキュラム上の時間的制約がある中で、例示されている内容を獲得するには、あまりにも学習時間が不足しているようである。そうしたことから、学習指導要領の内容と現場での学習内容とが乖離しているとの印象を抱いているようである。

## (6) 戦術理解

戦術学習には、その競技特性に応じた戦術的な理解が基礎となる。そうした戦術的に理解されることについて、レベルの難易度や時間的なことも踏まえて、以下のようにコメントしている。

表7 戦術的理解度

意識づけとしては、これを言葉で言って理解する子もいると思うんですよ。けれども、やっぱり理解できない子たちもいると思うんですよ。
普通の子たちですよ、そのまま現象をもってこさせるのは、難しいかな。そのときだけ「そうするぞ」と言っても、やっぱりその意味がわかっていないとその現象は出てこないですよ。基準はこっち（ボール操作）が高いですね。こっちやってからゲーム。これはより戦術的なところになってきますよね。自分はこっち（ボールのない動き）までは教えたことがないです。
守備の基本だと思うんですけど。それこそこれフリーズとかいれないと難しいですよ、指導は。サッカー部の生徒だったら言えばその場で修正できると思うんですけど、良い意味が解ってないとわからないですよ。じゃあ、この意味を覚える時間をどっかに作るかといったらないです。
これは空間も大事ですよ、空間までは頭に入っていない。結局目の前のことだけにしか、普通の子たちは頭に入っていない。
これも、ここを理解させるまでには、それなりの特訓・訓練が必要かと思います。ただ、これは性質的にボールと一緒に動く習性があるので素人の子たちは、「助け合いの心」を持っている生徒は必然的にカバーに入れるんですよ単純に。人間性です、サッカー的なことではなく。何事も一生懸命する子たちは、授業も一生懸命にやる。一生懸命やる結果、そういうカバーリングしたりします。
意図的ではなく、無意識にカバーしていました、いい生徒が。
サッカーをあまりかじってない生徒たちに対して、こういう言葉がそもそも伝わるかどうか、それをかみ砕いたとしても果たして可能なかどうかですね。

岩田らは、「偶然ばかりが支配するゲーム（パパ抜きのゲーム）からの脱却」<sup>13)</sup>が、ボール運動の授業づくりには必要であることを述べる。まさに、理解しないままでプレイして起こりうる現象は偶然でしかない。しかしながら、例示されている内容を生徒に理解させようとしても、「伝わるかどうか」と疑問を投げかける。獲得されるべき技能は、高度なレベルであり、それを言葉で説明しても生徒たちには、理解することが難しいとの立場をとっている。したがって、授業において起こりうる現象は意図的なものではなく、無意識的に生じるプレイが多くなっているのである。

## 4 結語

現場教員へのインタビュー調査から、学習指導要領の内容（例示）と現場とでは意識のうえで差異があることが明らかになった。

「安定したボール操作」というサッカーの基礎的技術となる個人スキルが一般生徒には獲得されていないなかで、「ボールを持たない時の動き」といったより専門的かつ戦術的なプレイが求められることに対して、教員側は指導に対して苦慮していることが理解できる。また、そこには、運動嫌いの生徒や女子への対応、技術指導よりも態度（意欲・関心）の重視、生涯スポーツへの連結、カリキュラム上での時間的制約などの影響も大き

い。

そうしたなかで、学習指導要領にて例示されている難易度の高いプレイについて、どこまで教員が迫っていくべきなのかを模索している現状があるといえる。

#### 文献

- 1 文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説 保健体育編」東山書房，p.83.
- 2 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説 体育編」東山書房，p.32.
- 3 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説 体育編」東山書房，p.49.
- 4 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説 体育編」東山書房，p.71.
- 5 文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説 保健体育編」東山書房，p.83.
- 6 文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説 保健体育編」東山書房，p.89.
- 7 文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編」東山書房，p.60.
- 8 岩田 靖，竹内隆司，大野高志，石井克之（2008）「もっと楽しいボール運動①」，体育科教育，56（11），p.60.
- 9 岡出美則（2017）「TGFUに係わる議論から学ぶべきこと」，体育科教育，65（2），p.9.
- 10 文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編」東山書房，pp.61-62.
- 11 文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編」東山書房，pp.69-70.
- 12 文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領」東山書房，p.90.
- 13 岩田 靖，竹内隆司，大野高志，石井克之（2008）「もっと楽しいボール運動①」，体育科教育，56（11），p.60.

# A Study on Tactics Learning in Physical Education (1)

## - Focusing on soccer -

Tadanori FUKADA

The purpose of this research is to clarify the actual situation of 'tactics learning' in physical education class and the consciousness of teachers from an interview survey to field teacher who do soccer classes.

In the method of research, this study conducted semi structured interviews, choosing teacher who have extensive experience as soccer experts. For the question items, this study set contents described in each "example" of "ball control" and "movement when not holding the ball" in the explanation on the curriculum guidelines in high school.

As a result, it was cleared that teachers are struggling with guidance and that there is recognition that the curriculum guidelines and the school side are divergent. Because Even if students have not acquired the personal skills that become the basic techniques of soccer called "skillful ball control", teachers must respond to the demand for more professional and tactical play such as "movement when not holding the ball"

**Key Words:** Physical Education, tactics, soccer